

20190820 修正版

用語	意味
アイデンティティ	自己が何者であるかを認識すること。自我同一性ともいう。 エリクソンは、青年期の発達課題でアイデンティティの確立をあげた。
赤ちゃんがえり	弟妹の誕生により、ミルクをほしがる、指しゃぶりをするなど、退行するような行動をすること。
アタッチメント	特定の対象との間に形成される、特別な情緒的な結びつきのこと。 愛着。ボウルビィが名づけた。
アニミズム	すべてのものには命があるという考え方。
アフォーダンス	環境の価値や意味は、人の知覚によってうまれるのではなく、環境自体が人に働きかけてくるものだという考え。ギブソン、J. J が提唱した。
安全基地	子どもが外の世界の探索行動を行う際の心のよりどころ。不安なときに、そこに戻っていける、愛着関係のある大人を指す。
アンビバレンス	両価性ともいう。相反する態度をあわせもつ状態のこと。たとえば傷つきやすい一方、自意識過剰で尊大な態度、など。
いざこざ	感情や欲求のぶつかりあい。
一次的言葉	岡本夏木が区別した、子どもが身につけるべき言葉。自分をよく知る人と、具体的な事項について対話するかたちの言葉。 幼児期の言葉の形態。
一次的欲求	生得的に備わっている基本的欲求のこと。生理的欲求ともいう。
遺伝説	発達は、遺伝的素質によって生まれつき決められているという考え方。ゲゼルの成熟説が代表的。
意味的記憶	言葉の意味や、さまざまな事象に関する知識の記憶。
インプリンティング	刷り込み、刻印づけともいう。 ローレンツが発見した、ひな鳥の実験で、最初に目にしたものを親とみなして愛着行動をし、それが成長後もずっと続くという現象のこと。
延滞模倣（遅延模倣）	遅延模倣ともいう。1歳半ごろ、相手の行動をみてから一定の時間が経過したあとに模倣する姿がみられること。目の前にモデルがいなくても、イメージから真似することができること。表象機能の発達を示す。
エントレインメント	新生児が、大人の話しかけに同調して自分のからだを動かし、また大人も子どもの動きなどに応答する相互作用のこと。 コンドンとサンダーが報告した現象。同期行動ともいう。

用語	意味
エンブティネスト シンドローム	空の巣症候群ともいう。たとえば子どもの巣立ちにより、親が親の役割を失ったと感じ、うつ状態になるなど心身の不調を訴えること。
外言	他者とのコミュニケーションに使われる音声言語。
解発刺激	相手の反応をさそう刺激のこと。
科学的概念	学校教育の中で言語化して教育される概念。
数や量の保存概念	形が変わっても量は変化しない、あるいは置き方が変わっても数は変化しないという概念。幼児はこの概念がじゅうぶん成立していない。
環境移行	入園入学、就職、結婚、災害、事故などの人生の出来事や移動で環境が変わること。
環境閾値説	発達において、身長や知能といった遺伝的な形質が現れるには、一定以上の環境的な条件が必要で、どの程度の環境が必要かは、その形質によって異なるとする考え方。ジェンセンが提唱した。
環境説	発達は、生まれた後の経験という環境的な条件によって決められていくという考え方。ワトソンが提唱した。
間主観性	子どもが生後5～6週間ごろから養育者が自分に関心をもっているかどうかを判断する能力。トレヴァーセンが名づけた。
感情制御	現れた感情を、まわりと円滑にしていくために、またコミュニケーションを円滑にするために、調整すること。
帰属意識	自分が所属する集団に対し、自分がその一員であることを意識すること。
協応動作	知覚と運動が結びついて行う動作。目で見て手で物をとるようなこと。
共同注意	ジョイント・アテンションともいう。 生後8～10 か月ごろ、相手が注意を向けているものに自分も注意を向けたり、相手の注意を自分に向けようとしたりすること。注意の共有。
共鳴動作	おとなの顔の動きを見ていた新生児が、同じような動作をすること。
ギャング・エイジ	家族よりも仲間の価値観を尊重させる時期。学童期の中学年ごろ。
向社会的行動	直接的な見返りを期待せず、人や社会のためになりたいという気持ちを行動にしたもの。他者への共感性が基盤となっている。
心の理論	他人の心の状態を推察し、他人の心の動きを理解・予測するシステムのこと。自閉症児はこの心の理論の獲得が難しいといわれる。
誤信念課題	心の理論が獲得できているかどうかを調べる課題。
ごっこ遊び	想像上のなかで世界をつくり、その世界のルールに基づいて遊ぶこと。おままごと、お医者さんごっこなど。

用語	意味
コンピテンス	みずから問題を解決し、環境の変化に適応していく能力。 有能感ともいう。ホワイトが提唱した。
3 か月微笑	あやしかけに対して微笑すること。誰に対しても微笑する。スピッツが命名した。
三項関係	子ども、他人、対象のもの、の3つの項目からなる関係。子どもは他人と対象のものを共有することによって、その対象を理解するようになる。
シエマ	物事を理解していくうえでのカテゴリーを作っていくこと。
自己意識	「自分」という存在を明確に意識すること。自己意識をもつのは、おおむね1歳後半から2歳ごろといわれている。
自己主張	自分の欲求をアピールすること。
自己制御	自分で自分の感情や欲求などをおさえたり、遅延させたりすること。
自己中心性	幼児期、他者の視点があることを認識できず、子ども独自の視点から物事を捉えてしまうこと。
自己中心的言語	幼児が活動中に、他者への伝達を目的としない、ひとりごとのような発語をすること。ピアジェが命名した。
自己調整能力	自己発揮と自己抑制を調整しようとする力。
自己統制	自己主張、自己抑制を経て、自分を納得させて自分をコントロールしていくこと。
自己発揮	他人との関係のなかで、自分の欲求を実現しようとすること。
自己評価	自分で自分を評価すること。
自己抑制	他人との関係のなかで、自分の欲求を抑えようとすること。
私事化	社会的、公的なことよりも、私的なことを優先する傾向。 プライベートーションともいう。
社会的参照	生後9～10 か月ごろ、はじめてであったものに対して判断がわからないとき、養育者の表情や様子を参考にして、物事を判断して行動すること。
社会的スキル	対人関係や社会生活に適応していくための能力。
社会的比較	自分を他者と比較することで、自分自身の考えや能力を評価しようとすること。フェスティンガーは社会的比較過程の理論を提唱した。
象徴機能	目の前にないものを、別のものでイメージすること。
社会的微笑	生後3か月ごろ、人があやすと笑うようになること。
重要な他者	両親、祖父母、保育士、教師など、子どもの養育を担う特定の人。子どもの発達に大きな影響を与える。
情緒的コンピテンス	感情に関する知識やスキル。
情動調整	情動を抑制したり誇張したりすること。
情動伝染	新生児期、他児の泣き声をきいてつられて泣くようなこと。

用語	意味
神経学的 ソフトサイン	子どもに出現する、身体の使い方のぎこちなさや不随意的なふるえ。
心理的離乳	思春期、親から精神的に自立しようとする行動。
スクリプト	日常的な時間の流れに沿って生じうる状況や人の行為などに関する一連の知識のこと。
スチューデント アパシー	青年期、学生が無気力になり、ただ無為に毎日を過ごす状態。大学生に多い。無気力（意欲減退）症候群ともいう。
生活的概念	子どもが様々な物事に関わることによって学び、そのことが子どもの中で論理的な関係を定義するようになる個人的・感覚的な概念。ヴィゴツキーが提唱。
性役割期待	性別に対する社会的、文化的なイメージに基づき、人が個人に期待する行動。
生理的早産	人間は十分に発達しないで生まれるため、養育者に長く依存することになること。ポルトマンが提唱した。
生理的微笑	新生児が発する、微笑のような表情。感情は伴わず、生理的な動き。
セルフ・エフィカシー	自己効力感。自分はここまでやれるという確信のこと。バンデューラが提唱。
選好注視法	赤ちゃんが興味のあるものを長くみつめるという傾向を利用して、赤ちゃんの視力を調べる方法。ファンツの実験。
漸成論	「心理社会的発達には、危機的段階の解決によって進歩する」という考え方。エリクソンが提唱。
センス・オブ・ ワンダー	神秘さや不思議さに、目をみはる感性のこと。レイチェル・カーソンが表現した。
相互同期性	新生児が人の話しかけを好み、その抑揚に同期して自分の身体を動かすこと。
ソーシャルアングル	地域の子どもに援助的な関わりをしてくれる大人。
ソースモニタリング	知識や情報の情報源を監視すること。
粗大運動	全身の移動運動や、からだの姿勢に関わる動き。
対人葛藤	自分の欲求などが、他人に邪魔されることによって起こる、対他人とのいざこざ。
脱中心化	学童期、自分の考え方以外の考え方があることに気づき、自分の視点からだけで物事をとらえる状態からぬけだすこと。
チャム・グループ	学童期後半～思春期前半の中学生ごろ、親友、特別に親密な関係として、相手との一体感をもつグループ関係。
展示ルール	他人の感情を推察して、自分の感情の表出や自分の行動をコントロールすること。

用語	意味
同型性	人間は、個性はあるが、同じタイプであり、たとえば相手の体に起こっていることが、自分でも理解できること。(痛みなど)
徒党時代	10～13歳ごろ、数人の同性同年齢の仲間ですぐ非公式集団をつくり、大人の干渉を逃れて仲間たちだけで行動することを好む時期。ギャング・エイジともいう。
内言	自分の頭の中で考えている言葉。思考の道具。ヴィゴツキーが提唱。
内的ワーキングモデル	子どもの心の中に形成された愛着対象についてのイメージ。「他者は信頼できるものであり、自分は他者に大切にされる価値のある人間である」という自己と他者についての確信。 ボウルビィが名づけた。これは子どもの心の安定感となり、他者との関係性にも影響を与える。
内発的動機づけ	自分自身の内部からの欲求が行動の動機となること。ブルナーが名づけた。自分自身の意思で行うこと。
二次的言葉	岡本夏木が区別した、子どもが身につけるべき言葉。不特定多数に向けて、具体的な場面とは異なる話を一方向的に伝える特性がある。作文、授業中の発言など。
二次的欲求	経験からの学習によって生じる欲求。生理的欲求を基盤として形成される。愛情、所属、社会的承認、独立についての欲求などが該当。
二重感覚(ダブルタッチ)	自分のからだを触るとき、自分が触れている感覚と、触れられている感覚の両方を意識すること。
発達の最近接領域	「子どもが自力で解決できる水準」と「誰かの手を借りればできる水準」との間の領域のこと。ヴィゴツキーが提示した考え方。
発達の節	ある時期に急に発達において質の異なる行動があらわれる時期のこと。発達の質的変換ともいう。たとえば、それまで歩けなかった乳児が歩けるようになること。道具を使えるようになること。
微細運動	手の細かい動き。
ピア・グループ	思春期後半の高校生ごろ、互いの価値観や生き方を語り合い、個人を尊重しあう関係性。
人指向性	赤ちゃんが生まれながらにして、人からの刺激に対して敏感に反応すること。
人見知り	生後6～8か月ごろから始まる、赤ちゃんが知らない他人に対する不安や恐れを抱くこと。これは、特定の養育者との間に愛着関係が築かれたことによって生じる。
ひとりごと	プライベートスピーチともいう。心のなかの思考を整理するため、自分の行動を導くために発せられる。幼児期が中心。

用語	意味
表示規則	社会生活のある場面において、どのような表情の表出が期待されるかについて、文化により異なる規則があること。 エクマンが示した。
輻輳説	遺伝的な要因と環境的な要因の両方があわさることで発達が決まっていくという考え方。 シュテルンが提唱した。遺伝と環境のそれぞれが独立して発展に関与するとした点で評価されるが、それらが互いに影響し合うという視点は示されていない。
分離不安	愛着関係形成後、子どもが養育者と離れることに不安を感じ、抵抗を示すこと。
母性剥奪	初期経験として、乳幼児と養育者との親密で継続的な人間関係が欠けている状態。 マターナル・デプリベーションともいう。
メタ認知	自分が何を考えているのかを認識すること。 自分がどういう認知の状態にあるのか、ということに関する認知。
ものの永続性	布で物を覆うなどして、ものが直接見えなくなっても、そこにもものは存在しているという事実のこと。生後8か月以降の乳児には、この概念を理解できるようになる。
ハンド・リガード	赤ちゃんが目の前に自分の手をもっていき、みつめ、口に入れようとする。手かざし。
役割取得	他者の感情や考えを推察して、自分に期待される役割を理解し、そのようにふるまえるようになること。セルマンとバイルンは、この役割取得を、母親などの養育者だけでなく、他者の視点までを考慮する社会的視点取得能力であると考えた。
リーチング	興味のあるものに手を伸ばすこと。
リテラシー	読み書きの能力のこと。
レジリエンス	ストレスを乗り越えていく力のこと。
レディネス	訓練や学習を受け容れるために最もふさわしい心身の準備性のこと。 ゲゼルが提唱した。